暁の寺

暁の寺

豊饒の海 第三巻

三島由紀夫

新潮社版

曉の寺

——豐饒の海　第三卷——

昭和四十五年七月五日　印刷
昭和四十五年七月十日　發行

定價六六〇圓

著者　三島由紀夫
發行者　佐藤亮一
印刷所　二光印刷株式會社
製本所　新宿・加藤製本所
發行所　株式會社　新潮社

郵便番號一六二
東京都新宿區矢來町七一
電話東京(03)二六〇一一一一
振替東京八〇八番

亂丁，落丁のものはお取替へいたします
© Yukio Mishima 1970　Printed in Japan

第一部……五
第二部……一四九

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

曉の寺

――「豐饒の海」第三卷――

第一部

一

バンコックは雨期だつた。空氣はいつも輕い雨滴を含んでゐた。強い日ざしの中にも、しばしば雨滴が舞つてゐた。しかし空のどこかには必ず青空が覗かれ、雲はともすると日のまはりに厚く、雲の外周の空は燦爛とかがやいてゐた。驟雨の來る前の空の深い豫兆にみちた灰黑色は凄かつた。その暗示を孕んだ黑は、いちめんの綠のところどころに椰子の木を點綴した低い町並を覆うた。

そもそもバンコックの名は、アユタヤ王朝時代、ここに橄欖樹が多かつたところから、バーン（町）コーク（橄欖）と名附けられたのにはじまるが、古名は又、天使都と謂つた。海拔二米に滿たない町の交通は、すべて運河にたよつてゐる。運河と云つても、道を築くために土盛りをすれば、掘つたところがすなはち川になる。家を建てるために土盛りをすれば池ができる。さうしてできた池はおのづから川に通じ、かくていはゆる運河は四通八達して、すべてがあの水の母、ここの人たちの肌の色と等しく茶褐色に日に照り映えるメナム河に通じてゐた。

市の中心部には、露臺のついた三階建の歐洲風の建築があり、外人居留地には二、三階の煉瓦造りも多かつたが、この町のもつとも美しい特色をなす街路樹は、道路改正のためにそこかしこで伐り倒され、鋪裝道路が一部に出來かけてゐた。のこる合歡の並木は、烈日をさへぎつて深々

と道の上におほひかぶさり、黑い紗のやうな木蔭の喪を布いてゐたが、暑さにしなだれた葉は雷鳴を伴つた驟雨のあとでは、俄かに蘇つて凜々しく葉末を反らした。

町の殷賑は南支那の或る都市を思はせた。横うしろの幌を外した二人乘りの三輪車が無數に往來し、時にはバンカッピ周邊の水田から、鴉を背中にとまらせたまま水牛が牽かれて通り、黑い輝やかしい汚點のやうに、癩の乞食の光る皮膚が物かげに在つた。男の子たちは全裸で走りまはり、女兒は金屬製の蛇腹の覆ひを股間につけてゐた。めづらかな果物や花は朝市で賣られた。支那人町の金行の店頭には、簾のやうに懸け列ねた純金の鎖が燦爛としてゐた。

しかし夜になると、バンコックの町は、ただ月と星空だけに委ねられた。自家發電のできるホテルはさておき、遞昇電壓器のある金持の家だけが、町なかのところどころにお祭のやうに光りを放つてゐた。多くはランプを使ひ、蠟燭を用ひた。川ぞひの軒の低い民家では、どの家も、佛座の一本の蠟燭で夜をすごし、佛像の金箔だけが竹簀の床の奥におぼめいてゐた。太い茶いろの線香をその前で焚いた。對岸の家々の蠟燭の火が川へ落すゆらめく灯影は、時折とほる櫓漕ぎの舟影に遮られた。

去年、すなはち昭和十五年に、シャムはその國號をタイと革めた。

――バンコックが東洋のヴェニスと呼ばれるのは、結構も規模も比較にならぬこの二つの都市の、外見上の對比に據つたものではあるまい。それは一つには無數の運河による水上交通と、二つにはいづれも寺院の數が多いからである。バンコックの寺の數は七百あつた。

綠をつんざいて聳えるのはみな佛塔であり、曉の光りを最初に受け、夕日の反映を最後までとどめて、日のあるあひださまざまに色を變へた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

小寺院ではあるが、十九世紀にラーマ五世チュラローンコーン大帝が建立した大理石寺院は、もつとも新らしい華麗な寺である。

當今のラーマ八世、アナンダ・マヒドン陛下は、昭和十年、御十一歳で位に卽かれたが、間もなくスイスのローザンヌへ留學されて、御十七歳の今も彼地で勉學にいそしんでをられた。御留守のあひだに、ルアン・ピブン首相は獨裁の權力を得、形だけ攝政府が諮詢してゐた。攝政は二人置かれた。第一攝政アチット・アパー殿下はいはば飾り物で、第二攝政プリディ・パノムヨンが攝政府の實權を握つてゐたのである。

お暇な上に崇佛の念の篤いアチット・アパー殿下は、しばしば各所の寺院に參詣されたが、或る夕刻に、大理石寺院へおいでになる旨が達せられた。

寺院はナコン・パトム・ロードの合歡の並木に挾まれた小川のほとりにあつた。

一對の石造の馬に護られた大理石の寺門は、古代クメール樣式の白い焰の結晶のやうな冠飾を持ち、赤さびた門扉をひらいてゐた。門からまつすぐに本堂へ向ふ甃の道の左右には、エメラルドいろに光る芝生の央に、古代ジャワ樣式の一對の東屋風の小閣があつた。芝生には丸く刈り込まれた灌木が花咲き、小閣の軒には焰を踏まへた白い獅子が躍つてゐた。

本堂前面の印度大理石の白い圓柱と、これを護る一對の大理石の獅子と、ヨーロッパ風の低い石欄とは、同じ大理白の壁面と共に、西日をまばゆく反射してゐた。しかし、それはただおびただしい金と朱の華文を引立たせるための、純白の畫布にすぎなかつた。ポインテッド・アーチ形の窓々は、內側の紅殼をのぞかせながら、その窓を包んで燃え上る煩瑣な金色の焰に圍まれてゐた。前面の白い圓柱も、柱頭飾から突然金色燦然とした聖蛇の蟠踞する裝飾に包まれ、幾重にも累々と懸る朱い支那瓦の反屋根は、鎌首をもたげた金色の蛇の列に緣取られ、越屋根のおのおの

の尖端には、あたかも天へ蹴上げる女靴の鋭い踵のやうに、金いろの神經質な蛇の鵐尾が、競つて青空へ跳ね上つてゐた。これらすべての黄金は、切妻に遊ぶ鳩の白も際立つほどに、熱帶の日光にむしろ暗く輝やいた。

しかし、次第次第に憂色の深まる空へ、何事かに愕いて、群立つときの白鳩たちは、煤のやうに黑くなつた。寺の錺りに繰り返されてゐる焔の意匠の、その金色の焔の煤が鳩なのだつた。

庭の數株の椰子は、突兀と、おどろいて立ちすくんだやうに見え、この「樹の噴水」は弓なりになつて、天へ綠の繁吹をいくつもひらいてゐた。

植物も動物も、金屬も石も紅殼も、光りの裡に混淆し融和して躍つてゐた。玄關を護る一對の白い大獅子でさへ、その大理石の鬣のさまは向日葵に他ならなかつた。その種子のやうな齒は、大きくカッとひらいた口のなかにぎつしりと並び、獅子の顏は、すなはち、怒りを發した白皙の向日葵の花。

アチット・アパー殿下のロールス・ロイスは門前に着いた。すでに芝生の左右の小閣あたりに居並んでゐた赤い制服の少年軍樂隊は、褐色の頰をふくらませて樂器を吹いた。ホルンの磨き立てた漏斗には、彼自身の赤い制服が小さく映つてゐた。熱帶の日の下でこれほど似つかはしい樂器はなかつた。

白い上着に赤い帶を締めた仕丁が、殿下の頭上に草いろの傘をひろげて從つた。殿下は白い軍服の上着に勳章をつけられ、布施を捧げた青い帶の侍從と十人の近衞兵に守られて、寺へ入られた。

殿下の御參詣はほぼ二十分で終るならはしだつた。その間、人々は芝生の上に日に灼かれながら待つてゐた。やがて內陣から支那風の胡弓の音が鉦にまじつて起つたとき、傘持ちの仕丁は、

金色の佛塔の纖細な飾りを頂きにつけた傘を擔つて入口に立ち、僧帽のやうな項に垂れた帽の近衛兵四人は石段に居並んだ。内陣は窺ふべくもなかつたが、まばゆい戸外から、燭の火のまたたきの見えるほどに仄暗く、そこから讀經の聲がしきりに起り、早間の囃子が昂揚した果てに、一點の鉦の音をとどめに樂は止んだ。

仕丁は草いろの傘をひろげて、退出される殿下の上に恭しくさしかけ、近衛兵たちは捧刀の禮をした。殿下はふたたび足早に門を出られて、ロールス・ロイスにお乘りになつた。

しばらくそのあとを見送つてゐた群衆も散り、軍樂隊も去つて、寺にはゆるやかに夕べの安息が來た。褐色の右肩を袒した鬱金の衣の僧たちは、川べりへ出て、本を讀み、あるひは語り合つた。川には朽ちた赤い花々、朽ちた果物などが流れ、對岸の合歡の並木と美しい夕雲を映した。日は寺の背後に沈み、草は暮れた。やがて寺院の大理石の圓柱や獅子や壁面だけが、辛うじて暮れ殘る白になつた。

＊＊

たとへば、ワット・ポー。

十八世紀末ラーマ一世の建立にかかるこの寺では、人は次から次と立ち現はれる塔や御堂の間を、搔き分けて行かねばならない。

その烈日。その空の青。しかし本堂の廻廊の巨大な白い圓柱は、白象の肢のやうに汚れてゐる。

塔はこまかい陶片を以て飾られ、その釉は日をなめらかに反射する。紫の大塔は、瑠璃いろのモザイクの階を刻み、夥しい花々を描いた數しれぬ陶片が、紫紺地に黄、朱、白の花瓣を連ね、陶器のペルシア絨毯を卷いて空高く立てたやうだ。

又そのかたはらには綠地の塔。日光の鐵槌が押し潰し、すりへらしたかのやうな石疊の上を、桃いろに黑い斑の乳房を重たげに垂らした孕み犬がよろめいてゆく。

涅槃佛殿の巨大な金色の寢釋迦は、青、白、綠、黃のモザイクの箱枕に、叢林のやうに高い金いろの螺髮を委ねてゐた。金の腕は長く伸びて頭を支へ、暗い御堂のむかうの端、はるか彼方に黃金の踵が輝いてゐた。

その蹠はみごとな螺鈿細工で、こまかく區切られた黑地の一區切ごとに、虹色にきらめく眞珠母が、牡丹、貝、佛具、岩、沼から生ひ出でた蓮の花、踊り子、怪鳥、獅子、白象、龍、馬、鶴、孔雀、三帆の船、虎、鳳凰などの圖柄を以て佛陀の事蹟をあらはしてゐた。

開け放つた窓は磨き立てた眞鍮の板のやうに眩ゆい。菩提樹の下を、褐色の右肩を露はして、その衣がオレンヂ色に映える僧の一群が通る。

それほど熱い、空氣自體が熱病にかかつたやうな戶外。塔のあひだにある澱んだ池にはつややかな綠のマングローブが夥しい氣根を垂らしてゐる。鳩の遊ぶ中ノ島の岩は青く塗られ、岩のおもてには巨大な蝶が描かれ、岩の頂きには黑い不吉な小塔を置いてゐる。

又、たとへば、本尊のエメラルド佛で名高い、王城守護寺ワット・プラケオ。

一七八五年の造營以來、つひに一度も毀たれたことのない寺だ。

雨のなかに、左右に金の塔を控へた大理石の階段上の、金色の半女半鳥が燦然としてゐる。朱の支那瓦とその綠の緣取りは、明るい雨にいよいよ艶やかに照り映えてゐる。

マハマンダパの廻廊の壁は、蛇蜒とラーマーヤナ物語の壁畫の連鎖に占められてゐる。

有德なるラーマその人よりも、風神の光輝ある息子、猿神ハヌーマンは、繪卷のいたるところに躍動してゐた。ジャスミン花の齒を持つた黃金の麗人シーターは、怖ろしい羅刹王に拐かされ

てゐた。ラーマは幾多の戰ひに、怜悧な目をみひらきながら奮戰してゐた。
南畫風の山々と初期ヴェネツィア派風の暗い背景の前に、極彩色の殿宇や猿神や怪物の軍があつた。暗い山水の上を、七彩の虹の色の神が鳳凰に乘つて飛んでゐた。衣服を着て坐つた馬を、金衣の人が鞭で手なづけてゐた。海からは怪魚がぬつと首をもたげて、橋上の軍勢に襲ひかからうとしてゐた。遠くに幽かな青い湖があり、暗い森かげをひつそりと歩む金鞍の白馬を、とある繁みから、劍を拔いて猿神は狙つてゐた。

＊＊＊

「バンコックの正式名稱を何といふか御存知ですか」
「いや、知りません」
「それはかういふのです。
クルング・テープ・プラ・マハナコーン・アーモン・ラタナコーシン・マヒンタラー・シイアユタヤー・マフマ・ポップ・ノッパラー・ラッチャタニー・プリロム」
「どういふ意味です」
「ほとんど飜譯不可能ですね。それはここの寺々の裝飾のやうに、徒らに金ぴか、徒らに煩瑣な、飾りのための飾りにすぎないのですから。
まあ、クルング・テープは『首府』といふ意味です。ポップ・ノッパラーは『九色の金剛石』、ラッチャタニーは『大都』、プリロムは『心地良き』といふほどの意味です。大げさなきらびやかな名詞や形容詞を選び出して、ただそれを頸飾のやうに繋いだだけのことなのです。
臣下が國王陛下に對して、

『はい』

と答へるだけのことを、この國の繁文縟禮は、次のやうに言はせるのです。

プラプウト・チャオ・カー・コーラップ・プロムカン・サイクラオ・サイ・クラモム。

これはまあいはば、

『誠惶恐惶頓首頓首』

とでも譯すほかはありますまいね」

――本多は籐椅子に深く凭れて、菱川の話をおもしろく無責任にきいてゐた。

五井物產が、この何でも知つてゐる、しかしどことなく汚れて得體の知れない、藝術家崩れらしい男を、通譯兼案內人につけてくれたのであつた。すでに四十七歲の本多は、何事も人まかせにすることが、とりわけこんな炎暑の國にゐては、自分の自分に對する禮讓だと思つてゐた。

本多がバンコックへ來たのは五井物產の招きによるのである。そもそも日本で商談がまとまり、その契約が日本法に基づいて成立したのち、外國で何らかのクレームをつけられて係爭が起つたときは、外國の法廷に訴へが提起されても、國際私法上の問題が生ずる。まして外國の辯護士は日本の法律に無知である。かういふときには日本から權威ある辯護士を招いて、日本の法律關係を向うの辯護士につぶさに說明して、訴訟を助けてもらふといふことがよく行はれてゐた。

五井物產はこの一月、タイへ十萬ケースの解熱劑「カロス」を輸出したが、このうち三萬ケース分の錠劑が、濕つて、變色して、效力を失つてゐた。有效期限內の明記があるのに、さうなつてゐたのである。かうした民法上の不法行爲は債務不履行で處理されるべきものが、向うは刑法上の詐欺罪で訴へて來た。五井物產は下請の藥品會社が出した商品の瑕疵について、當然民法七一五條の無過失賠償責任を負ふべきであるが、かうした國際私法上のトラブルには、どうしても

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com